

# 浜崎 美和 論文内容の要旨

## 主 論 文

Factors associated with depressive symptoms in Japanese women with rheumatoid arthritis

日本の女性関節リウマチ患者における抑うつ症状と関連する要因

浜崎美和, 折口智樹, 松浦江美

(Rheumatology Advances in Practice 6(1): rkac006, 2022)

<https://doi.org/10.1093/rap/rkac006>

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻

(主任指導教員：折口智樹教授)

## 緒 言

関節リウマチ (RA) は、慢性疼痛と関節障害による身体機能の障害を特徴とする進行性の自己免疫疾患である。男女比は1:3~4と女性に多くみられる疾患で、うつ病性障害の有病率は9.5~41.5%であることが報告されている。うつ病の合併は、慢性疼痛や疾患活動性を悪化させる可能性があることから、欧州リウマチ学会 (EURAR) は看護師の役割に患者の不安やうつ病のリスクを最小限にするための患者支援や教育を推奨している。しかし、RA患者の多くは外来診療であることから看護師が関わる機会は少なく、心理的評価や支援が十分とは言えない。

そこで本研究では、日本の女性RA患者を対象に、抑うつ状態に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

## 対象と方法

研究デザインは横断研究とし、2010年米国リウマチ学会 (ACR) /EURARのRA分類基準に従ってRAと診断され外来通院中の女性RA患者150名を対象に、自記式質問紙調査を実施した。

調査内容は、疼痛VAS、修正健康度評価質問票 (mHAQ)、自己評価抑うつ尺度 (SDS)、ストレス内容 (病気、仕事、家族、日常生活の困難さ、外見、治療、その他)、ストレス対処への自信、満足度 (治療効果、健康状態、医療従事者との関係) や支援者とした。医療情報は、診療録より、年齢、罹病期間、ステージ分類、クラス分類、疾患活動性、ステロイド剤使用の有無と量、生物学的製剤およびJAK阻害薬の使用の有無や投与経路を収集した。

自己評価抑うつ尺度 (SDS) のスコアが50点以上を「抑うつ傾向あり群」、50点未

満を「抑うつ傾向なし群」とし、この2群間について Mann-Whitney-U 検定を用いて群間比較を行った。また、SDS スコアを従属変数として他の変数との関係を Spearman の順位相関係数とロジスティック回帰分析を用いて評価した。

## 結 果

女性 RA 患者 145 名について解析を行った。対象者は、年齢の中央値 (IQR) は 63 歳 (54-70)、罹病期間 10 年 (5-19)、疾患活動性 2.5 (1.7-3.1) で、61 名 (42.1%) が生物学的製剤および JAK 阻害薬を使用していた。自己評価抑うつ尺度である SDS スコアの中央値 (IQR) は 43 (38-47) であり、抑うつ傾向を示したのは 18 人 (12.4%) だった。2 群間の比較では、抑うつ傾向あり群は抑うつ傾向なし群に比べて、mHAQ スコア ( $p=0.002$ )、疼痛 VAS ( $p=0.015$ ) が高値を示し、治療効果に対する満足度 ( $p=0.007$ )、健康状態に対する満足度 ( $p<0.001$ ) は有意に低値を示した。

ストレスの内容は、「病気」が最も多く、次いで「日常生活の困難さ」「治療」だった。抑うつ傾向あり群は抑うつ傾向なし群に比べて、ストレス対処に対する自信が有意に低かった ( $p=0.001$ )。SDS スコアは、疾患活動性、mHAQ、疼痛 VAS、ストレスと正の相関を、ストレス対処への自信、健康状態に対する満足度と負の相関を示した。多重ロジスティック回帰分析では、抑うつ傾向には、mHAQ、ストレス対処に対する自信、健康状態に対する満足度が関係していることが示された。

## 考 察

本研究では、治療は treat-to-target アプローチで行われ対象患者の RA は比較的コントロールされていた。しかし、抑うつ傾向を示したのは 18 名 (12.4%) で、先行研究の有病率 (9.5~41.5%) と同等であった。

日本の女性 RA 患者の抑うつ状態に関連する要因は、1) mHAQ スコアが高いこと、2) 知覚するストレス内容が多くの種類に及び、3) ストレス対処に対する自信が低いこと、4) 健康状態に対する満足度が低いことが明らかとなった。

抑うつ傾向にある RA 患者の状態を改善するには、患者の満たされていないニーズを評価し、それに応じて適切なサポートを提供することが不可欠である。Parker らは、効果的なストレスマネジメントにより、疲労や自己効力感、疼痛や健康状態が有意に改善したと報告している。

看護師は、たとえ治療で臨床的な改善がみられたとしても、患者の日常生活における困難やストレスマネジメントの状態を把握するとともに、患者に関わる医療専門職で情報を共有し、それぞれの専門的立場から支援することが重要であると考えられる。